藝える13

芸術未来研究場
って何だ？

東京藝術大学広報誌『藝える』第13号

発行日
2023年11月8日

編集・発行
東京藝術大学『藝える』編集部

編集長
藤崎圭一郎

アートディレクション
有山達也

デザイン
中本ちはる（アリヤマデザインストア）

写真
富田里美
（表紙、P1-5、10、18-19、26、27下-33）
長野陽一（P25）

校閲
西村 knack 雅彦

編集
小林沙友里
渡辺龍彦

事務局
東京藝術大学社会連携課

印刷
シナノパブリッシングプレス

藝える

うえる

「藝える」は「　　」と読みます。今号の特集は「芸術未来研究場」。日比野克彦学長が本学に立ち上げた領域横断型の新しい組織です。最初、その概要を書いた資料を見せられたときは、共創とか DX とか現代の社会課題につながる言葉は並んでいたものの、何を目指し、具体的に何をするのかがモヤモヤで、なにゆえ「けんきゅうじょう」ってわざわざ発音しづらい名前になっているかで、さらにモヤモヤした気持ちになりました。この特集はそうしたモヤモヤを晴らします。特集を最後まで読んでいただければ、「芸術未来研究場」の今まさに始まろうとしている数々の実践と、未来に向けてのビジョン、そして学長の思いがはっきりとわかってもらえると思います。藝大、面白くなってきています。

藤崎圭一郎／美術学部デザイン科教授・本誌編集長

目次

特集

01 学長っ！「芸術未来研究場」って何ですか？

02 日比野克彦学長からのメッセージ

04 芸術未来研究場の目指すもの

12 人の心と社会を動かす！ 産学官連携プロジェクト
みずほ　三菱地所　香川県＆香川大学
JR東日本　東京医科歯科大学　スクウェア・エニックス
ヤマハ／河合楽器製作所

24 芸術でウェルビーイングを実現「文化的処方」とは何か

30 日本サッカー協会、デロイト トーマツと考える アートの価値の測り方

34 授業SANKAN 藝大で学ぶ日常・非日常編
大学院映像研究科メディア映像専攻 インターメディア特別演習
＋
音楽学部器楽科 管打楽専攻オーボエ

40 お知らせ

学長っ!

特集

「芸術未来研究場」って何ですか？

香川県の瀬戸内海分校で行われたワークショップの様子。中高生たちが「海岸で自然を○○する道具」を制作、海岸で披露した。

芸術を愛する人よ、海に還れ。

あらゆる生命体は海から生まれ、進化した。
最初は小さな単細胞生物だったのが、
多細胞生物となり、やがて魚類、両生類、
爬虫類、鳥類、哺乳類が……というのが、
誰もが学校で習った進化の歴史。
それらすべての生命の起源となったのが、水。
海の中から生命が生まれ、
気の遠くなるような時間の果てに
生命は海から陸へ上がり、そうした果てに、
僕ら人類が今、陸上にいる。
海は、大昔から変わることなく、
ずっとそこにある。

芸術は、海みたいなものじゃないだろうか。
芸術の未来を想像していて、
ふと、そんなふうに感じる瞬間がある。
陸から見ると、海が陸や島々を隔てているように
見えるかもしれないけれど、海に視点を移すと、
海はすべての陸と島をつなぎ、

いつも揺れながらその間を満たしている。
その海から生まれて進化した人間が
芸術をつくったというのは間違いで、
実は芸術は、海のように
すでにそこにあったのではないか。
海が生命を育んだように、芸術は人を愛する。
東京藝術大学はそんな信念のもと、
変化する現代社会において
芸術が担う役割を、今も模索している。

芸術には、人の心を動かし、
社会を豊かにする力がある。
だから、それに携わる人間にも、社会を、
地球をよりよいものにする使命があるはず。
今一度、原点である海に立ち返り、
僕たちはこれから、
人と芸術と地球のこれからを、
揺れながら考えてみたいと思う。
果てしない海で、
まだ誰も体験していない航海を。
芸術未来研究場にようこそ。

芸術未来研究場の目指すもの

日比野克彦

ひびの・かつひこ／1958年生まれ。84年、東京藝術大学大学院を修了。95年より美術学部助教授、2007年より同教授、16年より美術学部長。22年4月1日、第11代学長に就任。岐阜県美術館館長、熊本市現代美術館館長、日本サッカー協会社会貢献委員会委員長を務める。

おもちゃ箱が積み上げられたような（？）学長室の一角から取り出したのは、学長自作の船のオブジェ。これが後々深い意味を……詳しくは本文で。

昨年春に発表された東京藝術大学
第4期中期目標・中期計画の中でひときわ
目を引いたのが、「芸術未来研究場」の基になった計画。
芸術と社会をつなぐ新しい「場」は、はたして
何を目指しているのか？　理事が学長に迫ります。

国谷裕子

くにや・ひろこ／大阪府生まれ。米・ブラウン大学卒。NHK 衛星放送『ワールドニュース』を担当したのち、1993年から23年間、NHK『クローズアップ現代』のキャスターを務める。現在は、SDGs の取材・啓発を中心に活動。2016年、東京藝術大学理事に就任。

国谷　日比野さんが学長に就任されて2年目。その4月に芸術未来研究場の創設が発表されたわけですが、藝大といえばトップアーティストを育成して世に送り出すという役割が世間一般に知られていて、もしかしたら学内でもそうした意識が強かったのではないかと思います。そんななか研究場をつくる背景には、これまで通りのやり方では藝大は立ち行かなくなるという危機感があったのでしょうか？

日比野　そうですね。国谷さんが理事として藝大に来られて、コロナ禍に入った後に『SDGs×ARTS展』をやりましたが（2021年7～8月、東京藝術大学大学美術館で開催）、そのきっかけになったのは、SDGsが目指すとされる17のゴールのなかに、なぜ芸術という言葉がないのか？という疑問。持続性のある地球をつくるために、僕は絶対に芸術が必要だと思っていたけれど、どうも学内を含めて、世の中の人にはまだ芸術というものの可能性が伝わっていないようだと感じたんです。脱炭素とか関係なく自分の世界観で表現をやっていればいいという考え方はどうなのかという問いを、あらためてちゃんと伝えていきたいなと思った。

国谷　そうでしたね。

日比野　そのことは、トップアーティストの育成とは少しも矛盾しないんです。素晴らしい音楽を聴いた人の気持ちが動き、世界の平和や貧困の問題を考え行動変容が起きることは、ありうるわけだから。芸術のための芸術ではなく、人のための芸術だということをもう少し意識していこうよと。同時に、企業に対してもそうした考えを促し広めていきたい気持ちもありました。「藝大に、つまりアートに投資することは、これからの社会課題の解決にもつながりますよ」という投げかけを、世の中全体に向けてしていきたい。そこで、大学全体の次の目標として芸術未来研究場の構想を立ち上げたわけです。

芸術を締めつけている ベルトの穴を緩めたい

国谷　SDGsについて藝大のミッションを考案しているとき、「芸術はずっと前からSDGsである」という言葉に触れ、なるほど、と思いました。芸術家はSDGsという国際的なゴールができる前から、自分たちの心のなかのざらつきや見えている矛盾などを発想の起点にしていて、サステナビリティとはずっと向き合ってきたんだと。そうしたことは言葉にしてみないと、おそらくアーティスト自身も気づかないままだったのではないでしょうか。

日比野　やっぱり、言語って大事なんだよね。ノーベル化学賞を受賞された野依良治（のよりりょうじ）先生は、芸術は人間の心の情緒であり、この情緒をまず言語化して、それによって理論化できた先に科学があるのだとおっしゃっていた。我々は日常、情緒のなかで右往左往しているけれども、言語によって体系づけられたものが科学につながり、日常のいろいろなサイクルに影響していく。科学の大元にはその言語を生み出した情緒、つまり芸術があって、心が動くことが伴わない限り、継続的なことは何もできないということなんですよね。

国谷　そして、この芸術未来研究場は、組織としてどうやって自分たちのやっていることを言語化していくか、その実践の場であると……。私はむしろ、日比野さんの狙いとして

は藝大を改革したいという思いが強くあるように感じたんですが、この研究場にどういうことを期待されているんでしょうか？

日比野　えーっと……昨年ＪＲが鉄道開業150周年で、東博（東京国立博物館）も150周年。藝大も、前身である東京美術学校と東京音楽学校から数えると、あと4年で140周年なんだけど、日本が西洋文明を取り入れてからそれくらいの年数が経ってるんだよね。芸術は「術」、つまりスキルだから、日本で芸術が言語化して体系づけられ、西洋のスキルでやり始めてから150年ほど。そうすると、今度はそのスキルが今のままでいいのか？という問題が出てきますよね。ＡＩや情報科学によって日常のツールは激変し、世界の自然環境も変化している21世紀に、芸術だけが150年前の考えのままでいいのかというと、僕はやっぱりだめだと思う。なんというか、これまでの思い込みをちょっと緩めたい。

国谷　緩めたい？

日比野　うん。芸術の役割……もっというと、教育や日常への取り込み方、価値観、活用の仕方なんかも含めて、ギュッと締められてるベルトの穴を、ズルッとほどく感じ。具体的にいうと「芸術なんて苦手だし、知識もないし、俺とは縁遠いな」と思われてるのは、今芸術に携わっている人間たちのやり方がずれているからなんじゃないかと。

国谷　うーん。

日比野　本来のアートの特性である、それぞれの人のその人らしさを認め合えるという点を広げていけば、芸術が「術」として理論化される前の情緒がそのまま共有されるのではないか？　それを誰もが、それぞれ得意な言語で言語化すればいい。そういう発信の仕方を、アカデミーの側からできないだろうかと僕は思っていて。ただ、それは藝大だけでは無理なので、芸術未来研究場という場をつくって、企業や行政、海外の機関などとつながりながら探っていきたい。

国谷　アートは一部のすごい才能を持った人たちだけがつくり、活用するものではないと。

日比野　そう。土壌をどんどん豊かにして広げていって、皆が関われるようなものにしていけたらいいなと思う。

東京一極集中でもアーティスト中心でもないアート。その実践として、現代美術館館長を務める熊本市では美術館に隣接する市役所へ足を運び「ご用聞き」と銘打った職員との懇談を実施。人と出会って心を動かす、これも日比野学長にとってのひとつの研究「場」か。

国谷　SDGsのことだけでなく、日比野さんがそう思うに至るまでには積み重ねがあったんでしょうね。

日比野　そうですね。岐阜県美術館や熊本市現代美術館の館長職を兼務しているけど、そこのパンフレットにはいまだに「唯一の国立芸術大学の学長」って書かれてたりするんですよ。でももう、時代が違うんだよね。1958年生まれの僕は、高校時代までは「岐阜にいちゃダメだ、東京に行かなきゃ！」と思ってて、藝大に入って東京で仕事を始めると「東京じゃダメだ！パリ、ニューヨークに行って勝負だ」と。でも今はぜんぜんそうじゃなくて、岐阜や熊本のアーティストは自分たちの地域性に誇りを持って発信してるし、美術館自体も自分たちを地域発信の拠点と考え、地域におけるアートの役割や社会課題に対して美術館がどんな役割を果たせるかをミッションにしつつある。じゃあ藝大も、いい意味でのプライドは持ち続けた上で次なる課題に取り組み、人材育成をしていかないと……そのために、かなり改革が必要だろうなと思ってます。実際、国からの予算も減ってきているわけだし。

研究場が横断領域とする課題のひとつがDX。社会的課題解決のためのアートに必要な技術の開発、実践が進められている。昨年大阪市で開催された『健康いきいき展』では、認知症の早期発見にゲームを役立てる実験が映像研究科と横浜市立大学により行われた。

国谷　確かに。アートが社会から必要とされる領域を広げることで、藝大自体も資金力を含めて力をつけ、環境をより厚くしていく……そのために藝大を支える柱をもっとつくらなくては、と。

日比野　うん。国に頼らない、っていうと、いい気になってんなコイツって思われそうだけど(笑)、やっぱり日本の何よりのアドバンテージって文化だと思うんですよ。自動車や電機メーカー、あるいはインバウンド産業だけじゃなく、日本の文化というのは世界の誰もが認めるもの。伝統的なものから、最先端のアニメ、ゲームまで含めてね。そこをどう産業と結びつけて国を豊かにしていくか……それは決して藝大だけで実現できる話ではないので。

国谷　すごくグローバルな構えですが、藝大の先生方それぞれがご自分の研究や制作、表現に力を注いでいるなか、芸術未来研究場とどういう関わりを持っていけばいいのか……それについては、どんな言葉で説明されますか？

日比野　うーん、先生方も、それぞれ専門分野を通して外部とのつながりがあるじゃない

ですか。でもそれは今まで調べようがなかったし、なかなか可視化されなかった。でもこれからは芸術未来研究場がプラットフォームになって、藝大にはこんなにいろんな人たちがいて、外の多種多様な人たちとつながっているんだということを発信できる……それもひとつの大きな役割になると思ってます。

国谷　つまり縦割りでない、横串の連携プロジェクトをつくる仕掛けにもなるわけですね。

日比野　うん。それをコーディネートしていく機能も今後は持てるといいなと思う。たとえば「藝大さんと組んでみたいんだけど」という人が外から来たときに、この先生とこの先生の研究を合わせると面白いことができますよ、という感じで。それがスタートアップとして新しい産業に結びついていくような仕掛けは、ぜひ組み上げていきたい。

最後に頼れるのは芸術文化。風向きは、きっと変えられる

国谷　そのための人材、必要ですね。マネージメントの仕組みも。

日比野　「こういう人材を求めてる」ということは、しっかりアピールして取りにいかないといけない。予算もね。そのためには、そもそも文科省が財務省からお金を出してもらうためのアイデアの提案が必要。教育に投資することが何よりも国への投資でしょ！って、大学が文科省と一緒に訴えていかないと。ほら、心って揺れ動くものじゃないですか。為替レートと一緒で「何か、こっち方面が景気いいらしいぜ」というムードをつくれば経済が動くように、人の気持ちや世の中のムード次第で芸術にも風が吹いてくるかもしれないわけで。当然、エビデンスや定量化も必要だけど、藝大が積極的に動くことによってアートが世の中に貢献できるという考えが広まれば、時代の風も変わるかもしれない。

国谷　「芸術でやっていこう」という意志が世の中に生まれて、定着していけばいいと。

日比野　「やっぱり最後に頼るところは、芸術文化だよね」というくらいのね。思えば、政治や経済はそれぞれの国で試行錯誤しながらやっていくものだけれども、芸術文化は人類全体がつながれる、もうひとつの国連のようなものにだってなれるはずだから。

国谷　芸術未来研究場の規則にも「新たな価値の創造」とありますが、それってアートが価値の転換をもたらす将来を目指すこと？

日比野　それを話し出すとおそらく「日比野、何言ってんの？」ってことになりそうなんだけど（笑）。でもね……ほら、僕たちって、陸上で生きてるじゃないですか。

国谷　陸上？？　うーん、そう来ましたか。

日比野　陸上には国があって、社会があって、システムがある。そこに、今は芸術文化が組み込まれちゃってますよね。でも、すべての大陸も小さな島々も、実は海でつながっていて、海は海底も含めてすべてが動いている。アートはつまり、そういう海の揺らぎのようなものだと考えてるわけ。だから、陸上ではなく海からの視点、それを起点として価値を考えたらどうなると思う？という問いかけによって、すべてを考え直していくというか。

国谷　自分たちが当たり前にしていた視点を、まったく別のところに置いてみると。

日比野　そう。芸術未来研究場では、そういう認識のもとに、芸術を通していろんなものをつなげていきたいと思ってます。

「いずれは日本各地に藝大の分校をつくりたい」と日比野学長。香川県・香川大学との協業（→P18）による瀬戸内海分校プロジェクトでは、地域の若手芸術家の育成支援など数々の試みが。

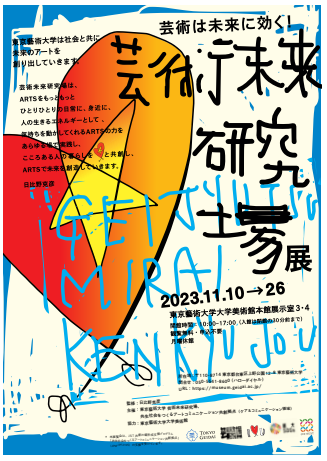
国谷　陸上での経済的な価値とか、これまで優先してきたものを変えることによって、より違う幸福感、ウェルビーイングな生き方が生まれて広まっていく……それって、おそらく社会の人や多くの企業が感じていることなんじゃないでしょうか。それに呼応する形で、アーティストの側も自分と芸術の向き合い方、あるいは社会と芸術の向き合い方を変革しなくちゃいけないのかなと、今、途方もないお話を聞いていて感じました。私たちは何のために成長するのか、そういう根本的な問いかけを自らにしていくんだと。

日比野　そうですね。でも、「考え続けていてもいいんだよ」っていうのは、アートにおいてはずっと許されてきたことなんです。悶々と見えないものを探り続けるのは、むしろ芸術が得意とすること。モヤモヤのなかに居続けるというのは、一見生産性がないように映るかもしれないけど、それぞれの人にとってすごく必要なことだと思う。

国谷　そのアートの役割を藝大の皆さんにも理解していただいて、それが社会から求められているという認識を共有してもらうのが、芸術未来研究場の必要性の理解につながる……ということでまとめていいのかな（笑）。そう、これはずっとお聞きしたいと思っていたことなんですが、なぜ研究「所」でなく研究「場」なんでしょう？

日比野　「所」っていうと、建屋がありドアがあり窓があり、鍵を閉められてるところを思い浮かべるじゃないですか。そこで、たとえばワクチンみたいなものを実験してつくるとして、誰にも確実に効果があってリスクのないものが開発できたら、それが正解……という場所が、僕にとっての研究所のイメージ。でも、新しいアートを創造するここはそうではなく、正解も、国谷さんにとっての正解と僕にとってのそれはたぶん違う。場所によっても、あるいは同じ人間でも昨日はそうだったけど今日は違うというふうに移り変わっていくものだから、絶えず新しいフィールドで動き回るという意味で「場」なんです。

国谷　なるほど……まずはこうして日比野さんの頭の中を言語化していかなくちゃいけなかったわけですね（笑）。どうでしょう？　皆さんに興味を持っていただけたでしょうか。



芸術と社会の未来像が見える!?
芸術未来研究場の展覧会を開催

今号で特集している芸術未来研究場の展覧会が11月10日にスタート。さまざまな産学官連携プロジェクトのプランやそこから生まれた作品などが一挙に展示されます。研究場の全体像と、そこで描こうとしている未来像が立体的に見渡せるこの機会をお見逃しなく。

東京藝術大学『芸術未来研究場展』

◎会期＝11月10～26日　◎休館日＝月曜　◎時間＝10～17時（入館は閉館の30分前まで）　◎会場＝東京藝術大学大学美術館本館展示室3・4（東京都台東区上野公園12-8）　◎料金＝無料　◎予約＝不要　◎問い合わせ＝050-5541-8600（ハローダイヤル）

人の心と社会を動かす！
産学官連携プロジェクト

えっ、あの企業、その自治体、この大学も、藝大と!?
そうなんです。さまざまな組織の特徴や強みと
藝大ならではの人材やその発想をかけ合わせた
ユニークな取り組みの数々をご紹介します。

イラスト＝山田だり

特別対談

アートで理想を表現できる社会に

みずほ

アートをもっと社会の中へ――。
藝大の呼びかけにいち早く賛同した〈みずほ〉。
組織が抱える課題の解決とともに、より良い世界の
実現を目指す、その構想に国谷理事が迫ります。

国谷　藝大はこれまで卓越した芸術家を育ててきた大学ですが、もっともっと社会とつながり、社会課題に対してアートが果たせる役割を大きくしていきたいという動きが、日比野克彦学長のもと活発になっています。しかしここ数年、コロナ禍に直面してアーティストの活躍の場が制限され非常に苦しい状況にあったなか、御行からの連携のご提案にはとても勇気をいただきました。行内で2年近くディスカッションを重ねたと伺いましたが、どのようなプロセスだったのでしょうか。

米澤　芸術と企業がつながるというイメージが先にあったわけではなく、まずは私自身が昔から藝大に憧れを抱いていたということが出発点でした。ご存じの通り、私たちの会社は金融機関で、お金を融通することが生業ですが、なぜお金を融通するかというと、それはよりよい未来や社会をつくっていくため。しかし、金融サービスや商品を扱う上では、どうしても思いや願いといったものが抽象化され、仕組みも画一化されがちなのが悩みどころでした。社員一人一人はアイデアや熱量を持っていても、自己抑制的に線を引いて壁の中に閉じこもってしまいがちで……。ここ数年、これを解き放つにはどうしたらいいのだろうかと思案していたとき、ふと「藝大」というキーワードが蘇ったんです。アーティストの方は、そうした壁を飛び越える力をお持ちなのではないだろうか？と。

国谷　アートとアーティストへの期待がすごく大きいので、ドキドキします。でも、提案書にあった「〈みずほ〉をリ・デザインしたい」という米澤さんの言葉には、私たちとしても非常に触発されるものがありました。

米澤　社員の持つ思いがあって、そこにアー

今年4月、美術学部デザイン科の学生が制作したトートバッグを贈呈したイベントでの米澤氏（右）と勝又裕介会津支店長（左）

文＝大谷道子

ティストの方々からの刺激を受けることで、さらに前向きになれるのではないかと。そこで、「藝大プロジェクト」と名付けた組織横断型のプロジェクトを開始しました。通常、大学や企業との連携を行う際は担当部署を定めて組織的に対応しますが、藝大プロジェクトは自発的に集まった社員たちのボランタリーな活動。経済だけでなく文化やアートの彩りが豊かな未来にしたい、そのための価値をしっかり生み出していける存在になりたいという理念に賛同してくれた人たちがメンバーです。具体的には、3つのテーマを立てて議論を進めています。1つには「アートをもっと身近に」。日本ではまだまだ日常生活とアートの間に距離があるということがいわれますが、その距離を縮める取り組みをしたい。

130年以上にわたり地元経済に関わってきた会津支店で、藝大とのコラボレーションによる地域活性化の取り組みを実施。

2つめは「アートでもっと元気に」。アーティストの皆さんから刺激をいただきながら、私たちもアーティストの発表の機会を増やすお手伝いをするなど、アートを介してともに元気になることをイメージしています。

国谷　この2つのテーマの実践として、『東京藝大アートフェス2023』（2023年11月～24年5月にオンラインで開催予定。「世界平和」をテーマに作品コンペを実施）へ協賛をいただきました。「みずほ賞」もこれから社員の方々のご意見をいただくことになりますが、きっとすごく多様な作品群だと思いますよ。

米澤　はい、たいへん楽しみです。他に、アートを身近に感じインスパイアされる仕掛けとして、社内SNSにおいて若手アーティストの方々から発信していただく計画があります。

国谷　社員の方々にどのような変化があったか、フィードバックがあると私たちも参考になりますね。もうひとつ、ジェンダーをテーマにした共同事業もプロジェクトが立ち上がっています。アート界はいまだジェンダー格差の問題が大きいのですが、企業社会での知見はもっと進んでいるのではないかと……。

米澤　こちらは3つめの連携テーマである「アートの力で変わりたい」にも基づくものですが、ジェンダーバランスの是正について

米澤武史
よねざわ・たけふみ
みずほファイナンシャルグループ
執行役

は実業界もまだまだの状態。長きにわたって続いてきた性差に基づく役割分担を生活の習慣から見直していくために、まずは定期的なブレインストーミングから取り組んでいます。

国谷　もうひとつ、アートとは切っても切れない課題として、お金というものをどう考えるかがあります。アーティストはお金に無頓着だと思われがちですが、今後、アートで社会課題を解決していくためには、その仕組みを知る必要がある。金融機関とつながることで体験的に学べるワークショップなどは、とても有用だと感じています。

米澤　そうですね。我々自身も営利企業として生き延びるため数字は押さえなくてはならないのですが、利潤追求だけではだめで、そこにはやはり理念が必要。そして、この利潤と理念の混ざった汽水域のような世界こそ、実はアートがもっとも輝く世界なのではないかと思っているんです。ですので、かつてのバブル期のように、アートを投機の対象とするような形ではなく、豊かな将来、未来を実現するためにお互いの強みと弱みをうまく補完し合える仕組みを考えたいと思っています。

国谷　素晴らしいですね。ひとつ具体的に動き始めているのが、会津若松市でのプロジェクト。みずほ銀行の会津支店をベースに、アートを介した地方創生の起点づくりの取り組みがさまざまに考えられています。

米澤　アートと地元、金融を掛け算して生まれたアイデアを展開することで、これから何が起こるのか、私自身も期待しているところです。まだ形が見えていない不安はありますが、そこは日比野学長にいただいた「屹度（きっと）できる」という言葉を胸に置きつつ。

国谷　米澤さんからご提案いただいたプランは、どれもギブアンドテイクの関係、かつ、できるだけ長期的に個人個人がつながる関係を構築しようとしているところが、本当にチャレンジングだと思います。

米澤　最近の世の中は、ゴールを決めてそこへ直線的に向かうにはどうする？という発想に偏りがちですが、物事はそんなに単純には進まないと思うんです。アートの力を世の中に広めることも、〈みずほ〉を50年後、100年後も社会から必要とされる存在にリ・デザインすることも、一朝一夕にできることではありません。しかし、時間をかけて思いを実現していく覚悟を持ち、3つのテーマの重なりを広げていけば、いずれは1つの大きな同心円となり、経済もアートも豊かな未来を実現させることができる……そうした物語を、今こそ語るべきではないでしょうか。

国谷裕子
くにや・ひろこ
東京藝術大学 理事

ひびのより ひとこと

お金が重要な共通単位になっている現代の生活のなかで、プライスレスな領域をどう考えていくか。新しい資本主義社会のあり方を金融機関とともに探求していけることにとても意義を感じています。

アートが街を“駆動”する 三菱地所

アートを介した実験的な街づくりを日本有数のビジネス街で数々手がける三菱地所。17年続く『藝大アーツイン丸の内』の開催をはじめ、藝大と協働して切り拓く、新たな街の姿とは。

大手町・丸の内・有楽町というビジネス街を中心に、人々や企業と協働して街に新たな価値を創出することを掲げ、アートに関するさまざまな取り組みを展開する三菱地所。

「時代が進むなかで人々の働き方は大きく変化しましたよね。我々の会社でも自分たちの利益だけを追求するのではなく、他の業界の人々と連携しながら新たなビジネスを生み出したり、トップダウンではなく若い層のスタートアップを支援したりと、従来とは異なる方法でブレイクスルーしていかねばならないと考えてきました。そこで、アートという存在がビジネスに従事する人々に新しいクリエイティビティをもたらし、ひいては本業の活性化にもつながるのではないかと思っています」と、執行役員の井上俊幸さんは言う。

藝大との連携事業として2007年から毎年継続してきたのが『藝大アーツイン丸の内』だ。丸ビルを会場に、藝大で学び「三菱地所賞」を受賞した若手アーティストによる展示や公演をはじめ、藝大の学生の多彩な活動を紹介するワークショップやイベントなどの開催が続く。藝大生にとって、大学内には作品発表の場が担保されているとはいえ、そもそも芸術の実践は経済社会と切り離されて存在するものではない。学生がオフィス街で作品を発表し、社会で働く人々の反応を肌身に感じる経験は、今後のキャリアにおいて大きな意義を持っている。

さらに22年、三菱地所と藝大は包括連携協定を締結し、藝大の本拠地である上野から東京駅周辺までより広範の〝まち〟を視野に、アートを介した産学連携の取り組みを一層強化することが発表された。その一環として目指すのが、大手町・丸の内・有楽町エリアに「アートセンター」を構築することだ。藝大と三菱地所のリソースを生かしアートとビジネスをかけ合わせることで、活力あふれる「東京」を共創し社会課題を解決していくとのことだが、その実どんな場所を構想してい

丸ビルのエントランスホールで開催された「三菱地所賞」受賞者による展示風景。（第16回藝大アーツイン丸の内より）撮影＝廣田達也

井上俊幸
いのうえ・としゆき
三菱地所株式会社
執行役員

文＝中村志保

中村政人
なかむら・まさと
東京藝術大学副学長
美術学部絵画科教授

るのか。地域に開かれた文化芸術活動の発信拠点として多くの人々を惹きつけた「アーツ千代田 3331」（23年3月に閉館）や、東京ビエンナーレの総合ディレクターなど、アートと街をつなぐ活動を行ってきた藝大の中村政人教授はこう話す。「ここでいうアートセンターというのは、いわゆる美術館が街へ開いていくという単純なものではなく、地域固有の文化から立ち上がってくるものを想定しています。決して縦割り型のコンテンツが用意された場所ではなく、予定調和的な場所でもありません」

社会人と学生が共に学ぶ夜間ゼミ「ストリート・スタディーズ」（2022年）。丸の内に生息する「雑草」の姿から都市と人間の関係性を考えた。撮影＝廣田達也

そのように始まるアートセンターが、最終的に政治・経済活動にも影響を及ぼす場所として機能するには、やはり日本一のビジネス街であるこのエリアに拠点を構えることの意義は大きい。同じビジョンを共有し面白がりながら協働を続けてきた、三菱地所のような〝寛容性〟のある企業が存在することは極めて重要だという。

「〝面白そうなことをやっている街だな〟と外から来ていただくことで、これまでにはなかった出会いや気づきが生まれるものです。アートは新たなイノベーションを起こすポテンシャルを持っていると強く実感しています。今後は、ビジネスの場とアートの場の相互理解の架け橋となる、いわばファシリテーターの役目を担う人を育てていくことが必要だと考えています。藝大からそのような人材が育つことを期待しますし、ビジネスの場で働く人のなかからも同様です」（井上さん）

「人間というのは誰しも、自分の人生に対する期待感を持ち、充実感を求めているものだと思います。アートがさまざまな業界や人々をつなげる力を持っているとするならば、アートセンターは新たな世界へとつながるために駆動するエンジンであるべきです。そのためには、さまざまな研究者や民間企業と協働して、文化政策や政治的課題に対しても積極的に取り組むことができるシンクタンク機能も兼ね備える必要があると考えています」（中村教授）

ひびのより ひとこと

人がよりよく生きるための「心の産業」を共に創出していきたいですね。三菱地所が培ってきた街づくりの知恵やビジネスのネットワークを借りながら、今後もアートの可能性を広げていけることを楽しみにしています。

瀬戸内の分校で継続的な研究を
香川県＆香川大学

20年以上にわたる連携にいま、新しい波が！
“地方の未来の縮図”である瀬戸内に拠点を
つくり、継続的なプロジェクトを展開する
分校の発起人たちの熱き思いとは。

「回った！」「揺れた！」「あれ、動かない…」。木や石、布や紙などでつくったものを海辺で披露し、一喜一憂しているのは、地元の中高生たち。「くらし⇅うみ」をテーマに藻場を見学したり漁師に話を聞いたりして、「海岸で自然を○○する道具」をつくり、実際に使ってみているのだという。これは香川県と藝大の連携事業「瀬戸内海分校プロジェクト」のワークショップの一幕。藝大出身アーティストと中高生が組み、リサーチから作品制作、展覧会の準備や運営まで行うプログラムだ。「地域の歴史や文化だけでなく、表現方法も学べる非常に良い機会ですね」。いきいきと活動する若人たちを見て目を細めながら語るのは、香川県文化振興課の織田浩幹さん。「文化芸術は人々のつながりや互いに尊重し合う環境を育んで活力ある社会をつくる。県としても積極的に取り組んでいます」。香川でアートといえば瀬戸内国際芸術祭（以下、瀬戸芸）が思い浮かび、〝うどん県〟と並んで〝アート県〟という通称も知られてきたが、そこには以前から海や山といった自然と、瀬戸内の交通の要衝として培った歴史があり、文化芸術を育む風土があった。そんな香川県は、藝大とは2001年度から美術学部、02年度から音楽学部と連携事業を県内各地で行ってきた。

コロナ禍でも遠隔で活動を続けていくなかでキーパーソンとして活躍したのが、香川大学創造工学部講師の柴田悠基さんだ。藝大の先端芸術表現科やグローバルアートプラクティス専攻で助手や助教を務めた柴田さんが17

8月のワークショップでは26名が4チームに分かれて活動。その成果は瀬戸内海歴史民俗資料館の『くらし⇄うみ』展で11月26日まで展示中。

織田浩幹
おりた・ひろき
香川県政策部文化芸術局
文化振興課 課長

柴田悠基
しばた・ゆうき
香川大学創造工学部
造形・メディアデザイン
コース講師

「芸術未来研究場・瀬戸内エリア」は庵治地区にある香川大の既存施設に隣接するかたちで新設される。手前に停泊しているのは香川大の船。

考え、藝大と合流。「香川に来て、この土地の文化や魅力を地元の人も理解すべきだと感じたのもありました。そこで教育プログラムとして確立させたいと日比野学長に相談したんです」。かくして昨年度スタートしたのが、「瀬戸内海分校プロジェクト」だ。藝大出身アーティストと地域の人々が共に学びながら制作するこの形式は、ほかの地域にも展開可能で各地に派生しているが、これを瀬戸内で始めることが重要だったと柴田さんは説く。「瀬戸内の特に離島は〝地方の未来の縮図〟なんです。近代化のなかで、たとえば都会にビルを建てるために海砂を取ったら海流が変化して魚が減るといったダメージを受けてきた。島々が多くて風光明媚だけれども、教育や医療、福祉が行き届かない。そこでアートを介した共創によって課題にアプローチしていくわけですが、島単位で区切られているからモデルを組みやすい。研究のフィールドとして価値があるんです」

そうした注目すべき研究の拠点として、高松市に来年、「芸術未来研究場・瀬戸内エリア」なる施設が整備される予定だ。「目の前が海で、香川大の船が2隻あって、飛び乗って海にリサーチに行くこともできます」と言うのは、香川県・香川大との連携事業を担当する藝大デザイン科の橋本和幸教授。「ここで香川大の他分野ともさらに関わっていきたいですね。創造工学部の先生に人工漁礁（魚が集まる漁場）を見せてもらったり、農学部の先生に講義してもらったり。それぞれが持つ知見や発想を掛け合わせることで、新しいものを生み出せると考えています」。〝アート県〟の潮流はここからまた変わっていきそうだ。

橋本和幸
はしもと・かずゆき
東京藝術大学美術学部
デザイン科教授

年に香川大にやってきたとき、香川大には「瀬戸芸に作品を出す」という目標があった。「香川大は総合大学ですが美術学部がなくて。瀬戸芸のお膝元にありながら芸術に弱く、強化したいというのが始まりでした」。19年には小豆島で演劇作品を出展したが、より継続性のあるアートプロジェクトを展開したいと

ひびのより ひとこと

自治体との連携では最も古い歴史をもつ香川県。香川大とも、創造工学部が創設されたときからのつながりがあります。瀬戸内海などの豊かな環境を生かしたアートと学びをますます深めていきましょう！

駅から広がるこころの〝輪〟

JR東日本

人々の移動を支える鉄道。
人々が交差する駅。
社会と人をつなぐJR東日本。
次なる目的地は、芸術のハブ、上野駅？

髙木浩一
たかぎ・こういち
東日本旅客鉄道株式会社
マーケティング本部
まちづくり部門長

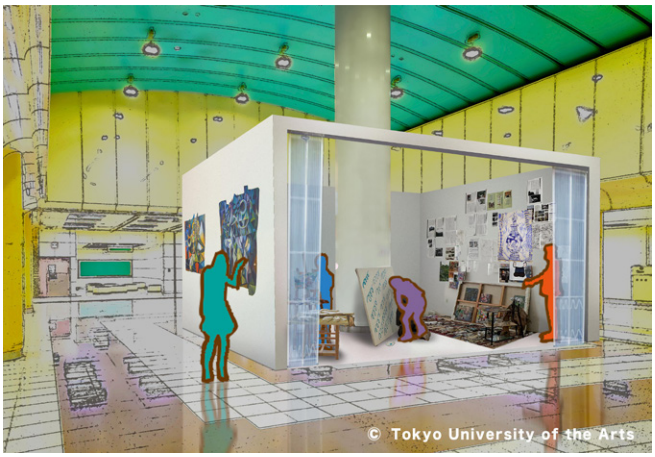
日比野克彦
ひびの・かつひこ
東京藝術大学長

各駅が持つ個性や文化とアートをかけ合わせた取り組みを行ってきたJR東日本は、グループ経営ビジョン「変革2027」における「くらしづくり」の実現に向け、従来の交通拠点としての駅の機能から、人／もの／ことをつなげる新たなプラットフォームへの変革を目指す「Beyond Stations構想」を掲げている。藝大との共同プロジェクトとしては、取手の駅ビル「アトレ」にアートを通じて地域の人々の居場所を生み出す「たいけん美じゅつ場 VIVA」の開設などをしてきたが、2023年6月に包括連携協定を結び、社会課題解決に向けた連携を強化することになった。

「これまで鉄道インフラの技術や知見を高めることで利便性を追求してきた我が社ですが、人々の生活や働き方が大きく変化するなかで、今後はより〝つながり〟を意識し、社会を豊かにするサービスの提供が重要だと考えています」と、髙木さん（まちづくり部門長）は話す。

今後の協業拠点として各地に構築する「JRE CREATIVE HUB」では、駅構内の空間資源を活用した展示スペースに加え、公開型のアトリエや市民参加型のワークショップやレクチャーが可能なスペースを設けるなど、これまでにない「アート×駅」のかたちを構想している。目下、首都圏の拠点として上野駅をアートステーション化するプロジェクトを計画中。

「文化とは専門家がつくるものではなく、日常のなかから生まれてくるもの。アートには人を引き寄せる大きな力があります。世界水準の教育研究が行われている藝大のネットワークと、1日に約1500万人の利用者を運ぶ我が社の強みをかけ合わせ、都市の文化力の向上に貢献していきたい」と髙木さん。また、日比野学長も「人やものを運ぶ鉄道のように、芸術もまた、ここではないどこかを想像させ、遠くにつれていってくれるもの」と力を込める。駅を拠点に、アートの力で物理的な距離を超え、豊かさの輪をつなげていく。



作品制作が行えるアトリエを駅構内に出現させてしまうアイデア。日比野学長は「社会にアートを開いていくきっかけになれば」と話す。

患者も職員も健やかな医療へ
東京医科歯科大学

合理的な病院の環境を
芸術的な感性を通してリニューアル。
患者の「治療」にとどまらない
職員の心もケアする居場所を目指して。

淺香えみ子
あさか・えみこ
東京医科歯科大学
大学病院 副病院長・看護部長

清水泰博
きよみず・やすひろ
東京藝術大学理事・副学長
美術学部デザイン科教授

コロナ禍で私たちの社会基盤を支えた医療の世界。人々の健康に不可欠な領域だが、病院職員は働く環境に対する切実な課題も感じていた――そう話すのは東京医科歯科大学病院看護部長の淺香えみ子さんだ。「医療業界は効率性や科学を重視する傾向があり、それは近年強まっています。一方、働く人の個性や内面の思いが着目される機会は少なく、会話は仕事の話ばかり。この無機質さを変え、患者と医療者双方にとってより全人的で健康的な環境をつくる上で期待したのが芸術との関わりでした」

こうして始まったのが、2023年に包括連携協定を結んだ同大と藝大の協働事業のひとつ「わたしたちの病院づくりプロジェクト」だ。病院の改装に伴うこの活動では、話をしながら院内を歩く病棟ツアーや職員インタビュー、ワークショップなどを通して病院の空間への意識を洗い出し、清水泰博教授らが改装案を検討している。

7月には初回の「しんぶんワークショップ」を実施。看護師や事務職から計12名が参加し、「医科歯科大で心に残っている体験」をお題にグループで小学生の日記風の新聞を制作した。「狙いはコミュニケーション。皆で話しながら、手を動かす時間や他者の考えを知ることの大切さを感じてもらえたら」と清水教授。参加者から「自分の体験を思い出すのに時間がかかったが、普段目を向けていなかった自分や同僚の気持ちに気づけた」という感想も飛び出したこの回は好評で、精神科からは追加開催を求める声も届いた。

今後はレゴを用いたワークショップなども予定。そこで見えたイメージを、実際の病院づくりに生かすという。「ウェルビーイングや社会的処方という考えが注目される近年は、生活や生き方のような総合的な観点で健康を捉えるようになってきた。この試みを、そのような、より人間らしい医療の一歩にしたい」と清水教授は話す。

現場で患者と直接コミュニケーションをとる看護師が中心となって参加した「しんぶんワークショップ」の様子。撮影＝中戸川史明

ひびのより ひとこと

多くの病院はこれまで「医者／看護師／患者」と属性を分けて整理してきたけれど、それをまとめて「住民」と考えてみるとどうなるか。そこにアートの視点が大いに役立つのではないかと期待しています。

文＝杉原環樹

産学共創。ゲーム教育の未来
スクウェア・エニックス

大学院映像研究科に「ゲームコース」が新設されたのは2019年のこと。企業と連携しながら目指すのは、これからの時代を拓く新たな芸術の道だ。

上：付美君《苗歌〜モン族の唄〜 / Songs of the Hmong》、下：山根風馬《Whale Fall》。

デジタルネイティブ世代の学生にとって、いまやゲームは生活の一部となったエンタメであり、コミュニケーションツールとも言える。「アートの表現方法が多様化し、学生の制作でもプログラミングやＡＩを使った技術が実際に必要とされているなかで、教員・学生ともにゲーム制作におけるノウハウが圧倒的に不足していることが大きな課題でした」と話すのは、岡本美津子教授。新たな展開の糸口となったのが、『ファイナルファンタジー』をはじめ数々の大ヒット作を手がけてきたスクウェア・エニックス（以下、スクエニ）だ。これまでも産学連携に力を入れてきた同社だが、「今の時代、ゲームはデジタルの総合芸術といっていいほど、あらゆるジャンルの芸術や技術を集積したコンテンツになっています。芸術的な素養を持つ藝大生の発想力は今後より重要になってくる」と、プロデューサーの時田貴司さんは話す。

２０１７年、スクエニからクリエイター陣を〝メンター〟として招聘し、実験的に授業がスタート。アニメーションをゲームに展開する「Ａ to Ｇプロジェクト」やその成果展を開催してきた。その後さらに内容を充実するべく「芸術と情報」をテーマに連続講義を実施。時田さんが特別教授を務める週１度のゼミでは、具体的な技術からマインドに関わる部分まで幅広く指導が入る。「現在は個人での制作が主ですが、アニメーションの観点を入れたり、曲から作れる学生がいたり、プロットを考えるのが得意な人もいる。カテゴライズできない面白さに可能性を感じます」（時田さん）

今後は、産学連携を深めながら「ゲーム専攻」の設置を目標に据える。「現状は藝大の教育実践にご協力いただいている面が大きいですが、映像研究科が得意とする分野を生かし、将来的には共同研究ができるよう尽力したい」（岡本教授）

時田貴司
ときた・たかし
株式会社スクウェア・エニックス
プロデューサー

岡本美津子
おかもと・みつこ
東京藝術大学副学長
大学院映像研究科
アニメーション専攻教授

ひびのより ひとこと

仮想現実空間での新たな価値や倫理観、リテラシーなどを一緒に研究していきながら、多様な表現を内包した「GEIDAI GAMES※」ならではの世界観で未来を創造していきたいですね。

※ゲームコースが毎年開催している成果展。ビデオゲームだけでなく多様なゲームの捉え方を含めた概念として「GAMES」と表記している。

文＝中村志保

ピアノの進化を止めるな！
ヤマハ 河合楽器製作所

国内の2大ピアノメーカーが本格的なグランドピアノを提供。演奏者と製作者が切磋琢磨し楽器と表現の可能性を広げる。

日本を代表するピアノメーカーのヤマハと河合楽器製作所。両社のピアノを藝大のレッスン室に設置し、学生の演奏指導に生かすとともに、演奏者の声を次の製品開発に生かす。そんな活動が、河合楽器とは２００６年、ヤマハとは18年から続いている。

両社が提供するのはプロも使うセミコンサートピアノという本格的なモデル。これを学生や教員が使用、年度末に反応を企業へ返す。「意見を聞く試弾者としてプロ志望も多い藝大生は適任。レッスン室という普段の環境での感想を聞けるのも大きい」とヤマハの一瀬忍さんは言う。

そもそもピアノという楽器は、長年海外製が強かった。そうしたなか両社は改良を地道に重ね、製品の質を上げてきた。「ピアノの評価は人それぞれ。だからこそ開発では数値と同じくらい『人の感じ方』を大切にしてきた」と河合楽器の技術者、阿部岐令さん。実際、同社では藝大の反応を受けて鍵盤の長さを変更したこともあるという。

では、学生にとっての協働のメリットは？　まずは個人で購入の難しい高価なモデルに親しめること。さらにその経験は、演奏者としての未来にも役立つ。なぜならプロには、演奏会場の楽器に即応する能力や、コンクールなどで自身に合うピアノを選択する能力が求められるから。「学生のうちから多様なピアノに触れることで、自分のなかに経験値や目安ができる。このピアノならこう弾くという柔軟性を磨くことがプロには大事」と江口玲教授は指摘する。

演奏者と製作者の関係は互いに「伴走者」だと迫昭嘉教授。「例えば自身の表現に追いつかないピアノをベートーヴェンが壊し、それに製作者が応えることで進化した」。しかしピアノに唯一の答えがあるわけではない。「だから両者がつねに切磋琢磨し続けている状態がベスト。この取り組みが目指すのもそうした状態です」

阿部岐令
あべ・きよし
河合楽器製作所
ピアノ事業部

江口玲
えぐち・あきら
東京藝術大学音楽学部
器楽科（ピアノ）教授
現在、河合楽器を担当。

一瀬忍
いちせ・しのぶ
ヤマハミュージックジャパン
鍵盤営業部

迫昭嘉
さこ・あきよし
東京藝術大学理事・副学長
音楽学部器楽科（ピアノ）教授
以前まで河合楽器を、
現在はヤマハを担当。

ひびのより ひとこと

楽器を演奏者に合わせてチューニングするだけでなく、演奏者も楽器に応じていく。あらゆるアート制作にも通ずる大切な感覚です。日本の２大メーカーのご協力で豊かな練習環境が実現できていることをうれしく思います。

文＝杉原環樹

芸術でウェルビーイングを実現

「文化的処方」とは何か

アートと社会の架け橋になるべく動き始めた芸術未来研究場。具体的に、アートはどういうかたちで私たちのそばにやってくるのか？　そのためのキーワードが「文化的処方」なのだが、これについては初耳の方も多いはず。先に国立研究開発法人科学技術振興機構から本格型プロジェクトとして採択された「『共生社会』をつくるアートコミュニケーション共創拠点」プロジェクトのリーダーであり、芸術未来研究場のケア・コミュニケーション領域を担当する伊藤達矢特任教授は、未知のシステムの輪郭をこう説明する。

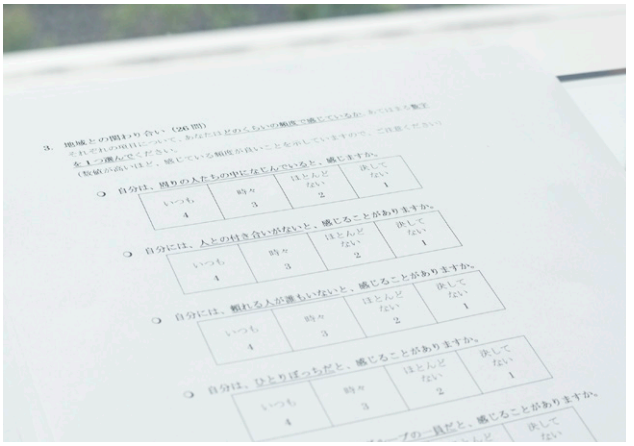
「文化的処方は、イギリスで実践されている『社会的処方』をもとにした造語。社会的処方とは人とコミュニティを結びつけることで健康と幸福の向上を促進する仕組みをいいますが、それを文化の力で加速させるのが文化的処方ということになります。アートに触れる創造的体験や、それを仲介するテクノロジーを生活のなかに導入することで、物質的な豊かさの持続性だけでなく人の心の豊かさの持続性を踏まえて、誰もがその人らしく生きられる社会に貢献することを目指しています」

つまり、アートが私たちにとって、健康で楽しく生きるための〝薬〟の役割を果たすということだろうか？　深刻度を増している超高齢社会、やがて心身に不安や不調を抱える可能性のある私たちの多くが、望まない孤立や孤独に陥ることなく社会のなかで健やかに生き続けていくための文化の処方とは、いかなるものか。現在、動き始めているプロジェクトから探っていく。

社会連携センター特任教授
伊藤達矢
いとう・たつや／専門は美術教育。東京藝術大学美術学部アート・コミュニティ形成事業特任助教、同特任准教授などを経て2022年より現職。

処方1
国民文化祭 in 岐阜

そもそも文化的処方が成り立つ根底には、芸術に触れることが人の体や精神に良い影響を及ぼすという仮説があるはず。しかし、素晴らしい演奏を聴いたり絵画や演劇を見たりしたときのときめきや充実感など、実感としてはわかるけれども、数値のようにわかりやすく表すのはなかなか難しい。これを解明しようとしているのが、岐阜大学医学部精神科の塩入俊樹教授。医師になる前は建築家に憧れ、陶芸が趣味でもある芸術肌の科学者だ。



項目をブラッシュアップ中の「高山　こころときずなのアンケート」。スマートフォンで回答できるアプリを開発し、国民文化祭でお披露目の予定。

イラスト＝北村徳郎　文＝大谷道子

「日比野学長は芸術が人の心を豊かにするのかをずっと追求されてきた。来年秋、出身地である岐阜で行われる国民文化祭（『清流の国ぎふ』文化祭2024』10月14日～11月24日開催）で藝大と岐阜大の協業をという話になったとき、『飛騨地方で文化的処方につながる研究を』とおっしゃったんです」

そうして白羽の矢が立ったのが、高山市。飛騨地方の中核都市として歴史や伝統があり、人口の流入流出率が少ない市は研究を行う場所として理想的。さらに、かつて大規模な健康調査が行われていたという下地もあった。

「高山は健康診断が非常に盛んな地域です。1992年から2008年にかけては、岐阜大が健康や生活習慣についても継続的に調査していました。文化的処方を取り入れることでさらに心豊かに暮らせる地域を目指し、まずは現在の住民の心身の状態、毎日の暮らしにおいての人とのつながりを尋ねるアンケートを作成中です」

題して「高山　こころときずなのアンケート」。日常生活のなかに興味のあることがあるか。意欲的で活動的な日々を送っているか。周囲の人とのコミュニケーションについて尋ねる項目は、孤立や孤独の現状を把握するためだ。これは社会調査としては比較的新しい指標であると、塩入教授は言う。

「たとえば心が塞ぎがちな人がいたとして、その人の問題は病気ではなく実は絆の欠如だったという場合もあります。孤立、孤独に陥っていることで心が沈み、健康も損なってしまうと。その場合は薬を処方するよりも、もしかしたら地域の集まりや美術館の展覧会に行くことを勧めたほうがいいのかもしれない。そうやって社会との絆を取り戻すのが社会的処方で、そこに芸術が関わるのが文化的処方。心身の状態が良くなるのはもちろん、『アートで長生きできる』という成果が出たら、うれしいですよね（笑）。そのためにも、処方が入る前の心と体の状態、幸福度や孤立度を把握し、起こる変化を長期間測っていけるシステムを構築するのが課題です」

そもそも、高山にはすでに文化的処方がなされているのでは？　調査に向けて下調べをするなかで、塩入教授はそんな感触も得たという。飛騨地方で盛んな地域の祭りがそれだ。

「高山市の代表的なものだけでも17あり、さらに、それぞれの地域の神社にもローカルな祭りがあります。そこへの参加を促すことも、住民の方々への文化的処方のひとつといえるのかもしれません」

岐阜大学医学部教授
塩入俊樹
しおいり・としき／精神科医・医学博士。滋賀医科大学医学部卒業後、同大学附属病院勤務、新潟大学医学部精神医学講座助教授などを経て2012年より現職。

処方2
岐阜街中マンションプロジェクト

さて、クリニックや薬局に行けば医師や薬剤師がいて薬を出してくれるように、文化的処方にも処方する「人」が必要。共創拠点プロジェクトにおいてそれを担当する「文化リンクワーカー」と名づけられた人材の育成が、

岐阜県美術館のアートコミュニケーターは「〜ながラー」という名称で活動。コロナ禍でも対策を講じながら活動を続けた。

同じく『「清流の国ぎふ」文化祭2024』に向けて始まっている。そのプログラムの推進役となるのが、岐阜市在住の2人。中部学院大学で障害のある子どもたちの人間発達を研究する水野友有さんは、当初、福祉部門の実行委員として選出されたが、「障害の有無にかかわらず人間のウェルビーイングに作用するアートに関心があるし、ご縁や偶然が重なってこの地域で活動することになり、新参者だからこそできることもあるのかもしれないと思い」、文化リンクワーカーの育成プロジェクトへの誘いを受けた。

岐阜県美術館を拠点に来館者と芸術をつなぐアートコミュニケーション事業の運営を担当する濱野かほるさんは、「自分自身が文化リンクワーカーになりたいという思いがあったのと同時に、美術館でこれまでアート・コミュニケータを育成してきたこともあり、その方々が福祉的な視点も持って文化リンクワーカーとして活躍する後押しもできたら」という期待も抱いての参加。文化リンクワーカーの活動として最初の舞台となるのは、岐阜市の中心部にある繁華街・柳ケ瀬にできた高層マンションである。古くから地域で商店を営んできた住民と市内外からやってきた新しい住民が同居しているこの場所で、交流促進の一環として文化リンクワーカーが住民のニーズを聞きながら一対一で文化的処方にあたる。

「住民の年齢層は幅広いと聞いていますが、文化的処方の目的としては、やはり高齢者の孤立や孤独が念頭にあります。でも『処方する』というより、一緒に町の文化の底上げをしていきませんか？という思いを丁寧に共有していきたい」と水野さん。また、コロナ禍のさなかに岐阜へ来た濱野さんは、「私のように地域の人となかなか親しくなる機会がな

中部学院大学人間福祉学部准教授

水野友有

みずの・ゆう／滋賀県立大学人間文化研究科博士課程修了。博士（学術）。旧京都大学霊長類研究所でチンパンジー母子研究に従事後、2005年より現職。

かった人が、じわじわと町になじんでいける取り組みになれば」と展望を語る。

文化を処方、という言葉はややいかつくも響くが、「美術展やコンサートだけでなく、町に潜在している文化的なコンテンツ……たとえば、手話が学べる喫茶店や週末だけ開く本屋さんといった、町に点在するユニークな場所も文化のひとつとして伝えたい」（水野さん）、「『気になることがあったらあの人に聞いてみようかな』という感じで、人と人のつながりをつくる存在に文化リンクワーカーがなっていけたら」（濱野さん）と、それぞれの抱くイメージはあくまで柔軟なもの。育成プログラムは11月に開始され、国民文化祭で第1回の処方の成果発表を目指している。

岐阜県美術館 AC事業担当

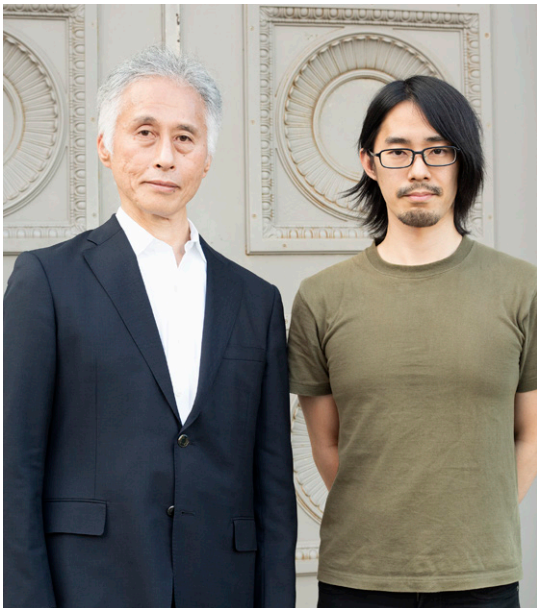
濱野かほる

はまの・かほる／多摩美術大学卒業。2016～19年に東京都美術館×藝大の「とびらプロジェクト」に参加。乳幼児や児童の体験プログラムなどに関わり、21年より現職。

処方3 横浜市電映像体験《シーデン》

文化的処方では、既存の絵画や音楽、映像だけでなく、最新のアート作品も処方され得る。神奈川県横浜市に拠点を置く大学院映像研究科では、横浜市立大学との連携により、最新のデジタル技術を取り入れた作品制作を通してアートDXによる芸術と人の新しい接点の創造が進められている。

この秋発表された作品《シーデン》も、そのひとつ。かつて横浜市の中心部を走っていた路面電車、横浜市電の車内を高精細の3Dスキャンで再現し、そこに4Dスキャンによるリアルな人物像を取り込み、まるで実際に乗り合わせているかのような拡張現実を展開。「見ることを考える」をテーマのひとつとして制作を行うアーティストの棗原寿行さんは、車内の空間をつくり出すにあたって「人間が普段見落とし



右から

東京藝術大学共創拠点推進機構特任講師

棗原寿行

くわばら・としゆき／東京藝術大学美術学部絵画科・情報科学芸術大学院大学（IAMAS）修了。2012年、《Eye》で岡本太郎現代芸術賞特別賞を受賞。

東京藝術大学大学院映像研究科長、メディア映像専攻教授

桐山孝司

きりやま・たかし／東京大学大学院工学系研究科修了後、スタンフォード大学設計研究センター、東京大学大学院情報学環などを経て2016年より現職。

てしまう部分を含めて、まるごと表現していくことを志した」と言う。

　より人の感覚や心の動きに沿った表現のためのテクノロジー。でもなぜ藝大が技術開発を?と不思議がるなかれ。実はそこにこそ藝大のアドバンテージがあると、「『共生社会』をつくるアートコミュニケーション共創拠点」プロジェクトで技術部門の研究開発課題を管轄する桐山孝司教授は述べる。

《シ－デン》展示より。シンプルなセットにタブレットをかざして近寄ると、時と人の痕跡が刻まれた市電のディテールが浮かび上がる。

「どんなにすごい技術があったとしても、それを使って人をワクワクさせ、自分自身も気持ちが上がる作品として生み出すことは、アーティストにしかできないことなんです」

　現在、プロジェクトが推進するのは、《シ－デン》のように映像技術を駆使した作品をつくり出し、それを広く世の中に届けること。なかには、東京医科歯科大学病院小児病棟でのプロジェクション・マッピングや、健康促進に役立つゲームアプリなど、さらに幅広い層に浸透する可能性を秘めた作品も多数ある。

「もうひとつには、ChatGPTなどで注目が集まる生成系ＡＩの活用。アートの分野では、とくに芸術作品の対話型鑑賞に有用ではないかと期待されています。人と対話しながらの鑑賞は孤立、孤独の状態にある人に外出する機会を促すことができ、それが不可能な人でもオンラインでの鑑賞がより豊かになるなど、社会参加につながります。近い将来、人間を相手にしたかのような対話が可能なＡＩも登場するはず」（桐山教授）

　つくるためにも、分かち合うためにも有用なテクノロジー。目下、企業や他大学とも協業が進んでおり、あちこちで芸術家の発想や表現力はますます求められることだろう。表現者である桒原さんも「凝り固まったアートのイメージを見直す機会になれば」と意欲的だ。人と社会をつなぎ、皆でよりよく生きるアイデアが必要なら？　高らかに言おう。「芸術は未来に効く！」と。

日本サッカー協会、
デロイト トーマツと考える

アートの価値の測り方

アートは多くの人の
心を動かすもの。その
目には見えない価値を
見える化するには？
そんな難題に挑む学長が、
スポーツの価値の可視化を
試みている2人を訪問。
未来の可能性を探ります。

デロイト トーマツ グループ
シニアヴァイスプレジデント
里﨑慎

東京藝術大学長
日比野克彦

日本サッカー協会
マーケティング本部 本部長
髙埜尚人

大谷翔平選手の活躍、ラグビーやバスケットボールのW杯の熱狂など、今年はスポーツから勇気や感動をもらったという人も多いだろう。スポーツには経済効果だけでなく、人々の心を豊かにする、若者に夢を与えるなど、目には見えない社会的な価値がある。

その見えない価値を可視化しようとしているのが、日本サッカー協会（以下、JFA）だ。2019年、企業価値向上のための経営戦略サポートを行うデロイト トーマツ グループ（以下、デロイト トーマツ）とパートナー契約を締結。昨年にはサッカーがもたらす社会的なインパクトの調査をスタートした。

アートや音楽もまた、目には見えない社会的な価値を持つ分野。JFAとデロイト トーマツの手法を芸術に応用する可能性を探るべく、日比野克彦学長がJFAの高埜尚人さん、デロイト トーマツの里﨑慎さんに話を聞いた。

日比野　私が理事や社会貢献委員会の委員長として長年JFAに関わるなかで感じてきたのは、JFAという組織は非常にスマートだということ。運営、会議の進め方、市民やスポンサーとのつき合い方など、あらゆる面で私にとっては学びの多い場です。今回はJFAとデロイト トーマツによる「スポーツの社会的価値を可視化する」という取り組みについて、我々藝大としてもぜひ参考にしたく、よろしくお願いします。

高埜　ありがとうございます。そもそもJFAがなぜサッカーの価値を可視化する必要性を感じたのかというと、まずひとつは、時代の変化です。かつては我々のパートナー企業も、サッカー日本代表の発信力やブランドなどにマーケティングのツールとしての価値を感じ投資してくれていました。でも今は、メディアも個人のニーズも多様化している時代。企業側も商品やブランドを宣伝するだけでなく、自社が抱える多様な課題の解決から社会貢献まで、マーケティング活動の内容が変わり、スポーツに対する投資の目的も変化してきました。

日比野　その結果、有名選手に頼った発信だけでは、企業とのパートナーシップが成立しなくなってきた、と。

高埜　そうですね。さらに各種スポーツの世界的な盛り上がりもあり、日本でもスポーツの価値が見直される動きが出てきました。特にサッカーは幅広い層に愛されているスポーツですから、ここでJFAがスポーツの価値を観客数や視聴率だけでない別の形で定量的にわかりやすく示せば、企業のスポーツ産業への投資はさらに増やせますし、スポーツの社会的価値を最大化できるのではないかと。もともとJFAは公益財団法人で、公益を目的に活動する団体です。スポーツの価値を可視化し、そのデータを活用してマネタイズに結びつけ、得た資金を公益事業に再投資していく。それが、この取り組みの狙いです。

右から

たかの・なおと／公益財団法人日本サッカー協会 マーケティング本部 本部長。2006年に入局。国際試合運営グループなどを経て現職。「社会的価値の可視化をスポーツ界に浸透させることは私のライフワーク」と語る。

ひびの・かつひこ／東京藝術大学長。無類のサッカー好き。2002FIFA ワールドカップのホストシティポスターなどを制作。日本サッカー協会で2010～15、20～22年に理事を、16年からは社会貢献委員会の委員長も務める。

さとざき・しん／デロイト トーマツ ファイナンシャルアドバイザリー合同会社 シニアヴァイスプレジデント。社内の新規ビジネスの公募に応募し、2017年に自社にスポーツビジネスグループを発足させた立役者。

文＝志村香織

日比野　マネタイズはあらゆる業界の存続と発展に欠かせませんが、日本のスポーツはプロよりアマチュアが盛んで、スポーツとビジネスが結びつきにくい土壌がありましたよね。

里﨑　弊社グループのデロイトＵＫでは35年以上前からスポーツビジネスを進めていますが、日本ではスポーツビジネスの認知が薄く、ようやく社内に専門部署が立ち上がったのが２０１７年です。その後、ＪＦＡから相談を受け、提携に至りました。パートナー企業との関係性を露出重視型から価値共創型とのハイブリッドへと移行させていこうというＪＦＡの考え方、つまりスポンサーがお金を出しておしまいということではなく、一緒に新しい価値をつくっていこうという発想に可能性を感じました。ＪＦＡはサッカーの全国的なグラスルーツ活動も実施していて、大きな社会的価値を生んでいます。その活動資金を継続的に集めていく仕組みづくりに少しでも貢献できればと考えています。

日比野　スポーツの価値を可視化するための指標として、社会的投資収益率（ＳＲＯＩ）を採用されたそうですね。

里﨑　ＲＯＩ（投資収益率）は「ここに投資するとこれだけ効率がいい」という指標を出すツールですが、ＳＲＯＩでは「どのくらいの社会的価値が創出されるか」も測定できるんです。スポーツを観戦する前と後では、気持ちがポジティブに変わり、その先には行動変容が起こります。これは社会的にとても価値があることですが、その効果が可視化されてこなかった部分でもあるので、ここを可視化しようと挑んでいます。芸術もスポーツと同じく、マインドと行動を変容させるものですよね。この仕組みを運用できる可能性はあると思います。

日比野　実は、我々は今年４月に芸術未来研究場のなかで「文化的処方」という産官学連携の大型プロジェクトを始めたんです。これはアート、福祉、医療、テクノロジー分野が壁を越えて協働的に研究することで、人と人とがゆるやかにつながり、誰もが生涯を通じて参加できるウェルビーイングな社会の共創を目指すもの。こういう取り組みを定量的に表現できたらと思っているんですよ。ひとつ実践しようとしているのは、文化庁と各都道府県が持ち回りで共同開催している『国民文化祭』で毎年参加者の意識調査を行って、その結果を「文化的処方」の研究材料として活用するプラン。気長にデータを取り続けなくてはならないんだけど、藝大がこういう試みをスタートすれば、必ず「文化に投資しよう！」っていう人たちが出てくるはずだから、まずは動き始めることが大事だと思っていて。

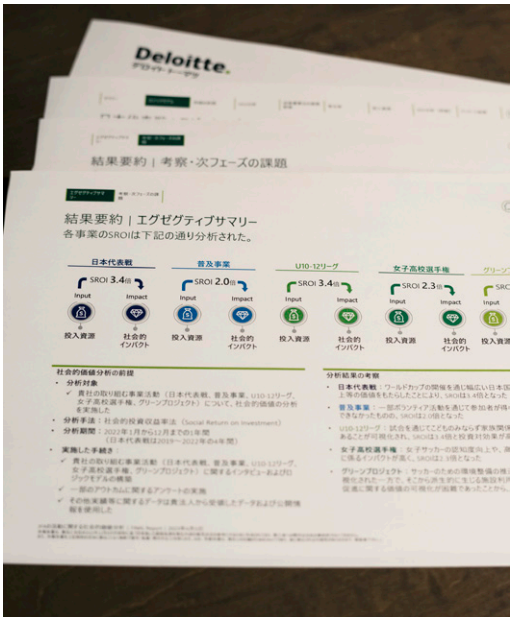
髙埜　モチベーションを生み出すことが大切ですよね。これは22年にカタールで行われたサッカーＷ杯のあとに調査をして明らかになったことなのですが、一昔前までは勝ち負けに一喜一憂するサッカーファンが多かったけれど、今はそれだけでなく、「元気をもらった」「自分も頑張ろうと思った」など、試合を観戦したことで自分のモチベーションが高まったという人がどんどん増えています。そこからさらにもう一段階進み、私たちのようなコンテンツを提供する側が自分たちの生み出している価値をわかりやすく提示することができれば、それこそ「投資したい」といったさらなる行動変容につながるんじゃないかと。

日比野　そうですね。さらに言えば、そのモ

チベーションもパッと火がついて消えてしまうのではなくて、いかに保ち続けてもらうかを考えることも大事。たとえば、SDGsに対しても、芸術が果たせる役割はあるんです。SDGsの17の目標に芸術という言葉は出てこないんだけど、では芸術は関係ないのかといえばそうではなく、むしろ、17の目標すべてに接続すべき必要と出番がある。なぜなら、里崎さんがおっしゃったように、芸術には人々の心を動かし、行動を変容させる力があります。例えば、ある人があるアート作品に出会ったことをきっかけに、自然の大切さに気づき、環境に配慮するような行動を取り始める、ということも起こり得るわけです。逆に、心が動くようなきっかけがなければ、行動変容の継続性が下がり、物事が続かなくなることも考えられる。そういった面では、17の目標のカラーがすべて混ざった真ん中の部分に、芸術があるという見方もできます。

里崎　たしかに。誰かに言われたからやる、では続かないんですよね。心の奥に響いた体験から生まれる行動は、折に触れてそのときの感情や共感が蘇ってくるので、おのずと継続されていく。その恩恵は大きいと思います。

日比野　芸術が社会に与える価値を数値化し、モチベーションを生み出すことと、そのモチベーションを継続してもらうこと。これは展覧会をひとつ開いて発表したところで実現できるようなレベルのものではないので、芸術未来研究場として長期的に発信していきたいと思います。藝大の活動に関心を持つ企業とそうでない企業があって、現状は残念ながら後者のほうが多いんだけど、とはいえ、芸術は社会全体に関わるものです。アートの持つ社会的なインパクトを感じてくれる人を少しずつ増やしていって、あるところでグンと拡大できたら。今、頭のなかでそんなイメージができているので、これはいずれ形になるんじゃないかな。これからもぜひご協力をお願いします。



社会的価値の分析事例。サッカー日本代表戦が国民に心理的な価値をもたらし、投入資源に対する社会的インパクトが2019年からの4年で3.4倍に。SROIを用いるとこのようにわかりやすく数値化できる。

里崎　もちろんです。一般的にビジネスというとお金稼ぎの印象が強いですが、この分野でのビジネスとは、価値のある活動に必要な資金を自力で集めることだと思っています。芸術には明らかに社会的価値があり、それが経済的な理由で弱体化してしまうとしたら、人類の財産が減ってしまうのと同じことです。芸術という分野はサステナブルに成長していくべきだと思っているので、ぜひ一緒に取り組んでいけたら、私たちとしてもうれしいです。

映像研究科

PART 1

大学院映像研究科メディア映像専攻
インターメディア特別演習

2週間でゼロから作品完成？先生、それは無茶です！

課題「横浜中華街で『避難訓練』を」

「芸術って、学ぶことができるんですか？」

こんな質問を投げかけられたことがあります。相手は進路模索中の高校3年生。つくるにしろ演奏するにしろ、芸術活動は個々が持つ才能を磨いた末に披露するもの。それってそもそも誰かから教わったり習ったりするものなんですか？と。

そういえば、そうですね……迷いを胸にグルグルさせながら藝大の元町中華街校舎を訪れたのは、初夏のこと。見学するのは、ここを拠点とする大学院映像研究科メディア映像専攻の1年生のインターメディア特別演習。同専攻の5人の教授陣から出される課題に応え、リサーチから実践、アウトプットまでを2週間ごとに5回連続で行う、それはそれはハードな授業だそうです。きっとあの問いにも答えてくれるはず……（他力本願）。

お邪魔したのは、その第2回。指導担当は独自の演劇観をベースにしたアートプロジェクトを国内外で展開する高山明教授である。授業の冒頭、14人の学生たちに申し渡された課題は「横浜中華街で『避難訓練』を実施する」。

避難訓練？　といっても、サイレンとともに走り出すとか、火事に放水するとか、もちろんそんなものじゃありません。深遠なテーマ性をごくごく端折ってお伝えすると、中華街を舞台に日常から逸脱＝避難するためのプランを設計すること。作品化するメソッドは、教授曰く「コンセプトを練って、ドラマトゥルギー（＝劇作術）を考える」とのことである。

静まり返る講義室（気持ちわかる）。コンセプトはさておき、

白熱する講評会。ときには教授陣が、講評の仕方をめぐり議論する場面も。教える側にとっても修練の場だ。

眼光鋭い高山教授。だが特演中は「毎日悪夢にうなされた」という繊細さも吐露。

授業SANKAN

藝大で学ぶ日常・非日常編

大学院映像研究科メディア映像専攻 インターメディア特別演習
＋音楽学部器楽科 管打楽専攻オーボエ

集中講義も普段の授業も、それぞれに芸術は真剣勝負！
教える側、学ぶ側の情熱が熱く豊かに
共鳴した、2つの授業をSANKANしました。

挿絵＝小柳景義　文＝大谷道子

ドラマトゥルギーについては少々、高山教授自身の作品を紐解きながら解説しよう。2010年の国際舞台芸術祭『フェスティバル／トーキョー』で発表した《完全避難マニュアル》は、山手線全29駅（現在は30駅）に座禅や外国人との交流

リハーサルとしての第1回発表も、講評会と同じ会場で。人前で発表する機会が、表現者としての彼らを磨く。

など非日常的な体験ができる場を設定し、地図を頼りにそれらを巡るというもの。参加者は、山手線が象徴する東京の時間から逸脱するという物語の演じ手としてドラマトゥルギーを実践するのだ。

「ドラマじゃなくてもいいんだよ。訓練ってことはリハーサルでしょ。もっといえば避難〝ごっこ〟。遊び、つまりはPLAY（＝演劇）だと」

中華街というリアルな空間に何らか例外的な状態を起こし、現実的な危機を回避する迂回路を提示する……そのアイデアを個々に見つけ出してほしいと高山教授。発表（教授はレクチャー・プレゼンテーションと呼称）は1週間後と設定された。な、難易度高すぎません？　しかしこののち、さらなる畳みかけが行われることになるのだ。

グループワークは突然に

学生たちは偉かった。難しい課題を各人が消化し、1週間後の授業では、14本のユニークな避難訓練、そのアイデアが発表されたのだった。

終電を逃した中華街で、翌朝までいかにサバイブするかを示したプラン。通話アプリで知り合った男性と中華街の建物を診断して回るバーチャルツアー。中華街の子ども食堂の支援策、民話をもとにした仕掛けで子どもの避難所をつくるプランなどは、現代の社会状況を踏まえた提案だ。さらには、学生自身の引っ越し先探しを兼ねる場所からの避難（！）と捉えたもの、中華街名（迷？）物の客引きと入れ替わり、彼らを仕事から避難させるという仰天プランなどが披露された。もちろん、たった1週間での立案ゆえディテールは虚構混じりだが、ときおり高山教授から

「これ本当？」と確認が入るほどのリアルさも。

「全員ベースはできてるね。それぞれ質を高めてほしいんだけど……」続けて教授が発表したのが、もうひとつの課題。3チームに分かれ、それぞれが14本のなかから1つを選び3本の映像作品をつくるというグループワークが課されたのだ。ゴールの講評会まであと4日（実質3日）なのに！

そもそも、こんな短期間での作品づくりってあるんでしょうか？　グループ分けと作品選びに右往左往する学生たちを背後に感じながら問うと、

「ないでしょうね。僕でも1年以上かけて準備す

授業を終えると、学生たちは街や図書館へ出かけリサーチ。ネット検索だけでなく足で稼いでの発見も数々。

るから」と高山教授。ううう……。

「でも、プランだけなら何とかなるかな。半分は遊びですからね。学生たちは皆、真面目にやる人たちだから、むしろ真面目にやりすぎないようにするのが僕の役目」

課題に上手に応答することがすべてではない、と教授。短期間に頭と体をフル回転させる演習は、長い創作人生の1ステップ。そういえば授業中、教授はこんな話をした。ともにサケ科の魚であるヤマメとサクラマス。実は同じ魚で、生まれた川に棲み続けるのがヤマメ、そこから出て海に下りるのがサクラマスなのだという。

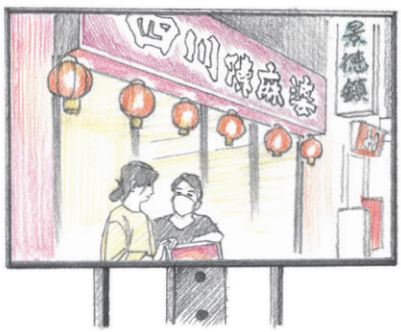
「環境とか条件をひたすら受け入れるヤマメと、広い世界に出て変容していくサクラマス。どっちもいいんだよ、きれいな魚だから。でも、条件に応えて上手につくるヤマメばかりじゃなく、与えられた条件を拡張して面白く裏切るサクラマスがたまに出てきてくれるといいなぁと、僕は思う」

人に見られて進化する

そうして迎えた最終日の講評会。紙幅の関係での超ダイジェストが申し訳ないほど学生たちは奮闘し、5人の教授と助教、助手陣を観客に、まずは前回からかなりブラッシュアップされた14本の個人別レクチャー・プレゼンテーションが披露された。

内容、形式、パフォーマンスの技術……教授陣から各人、各作品に飛ぶのは、やはり厳

朗読、映像など得意を生かしたプレゼン。映像化された《中華街の針》（上）は道端の串を風水占いにつなげるアイデアが評価された。



メンターとして参加したリサーチャーの田中沙季さん（左）は「学生の皆さんが背負うものの重さと放つ輝きの両方を感じた」と総評。

一部作品は7月に同校舎で開催の成果発表会「OPEN STUDIO 2023」でも公開。

しい指摘だ。しかし、ここで気づかされたのは、作品は観客があってはじめて進化するということ。視線を受け評を得ることで、学生たちの表現力が短い期間にもぐんぐん進化するのが見て取れる。

続いて発表された映像は……やはり時間的、労力的負荷を前に力尽きた印象（「スケジューリングに無理があった」と高山教授からも弁明）。しかし、過酷な挑戦を成し遂げた14人に、教授陣からは「考え、つかんだものをレクチャーに移すことには成功した」（桐山孝司教授）、「誇張や飛躍が加わればもっと作品らしくなる」（桂英史教授）、「注意深くじっくりと、分析的に映像を見る癖をつけるように」（畠山直哉教授）、「グループワークで自分の世界をさらに拡張してほしい」（服部浩之准教授）とエールが送られた。

かくして演習Ⅱを終えた14人。前期中に5つの特別演習を終え、今は早くも翌々春の修了制作を見据えて個々の創作が始まっているはずだ。末はヤマメかサクラマスか？　それは水に放たれてみなければわからないが、少なくとも進化の過程をまざまざと見せられた2週間であったことは、確かだ。

PART 2

音楽学部器楽科
管打楽専攻オーボエ

楽器をつくる、自分を奏でる

上條さん。美術への関心も高く、アートフェスなどにも積極的に参加している。

あれ？　なんだかいい香り

続いて夏に訪れたのは上野の音楽学部。器楽の個人レッスン取材、実ははじめてなんです。興味ありますよね、日本最高峰の個人授業。イメージとしては、口髭をたくわえた紳士の先生がマホガニーの椅子に腰掛け、「さあ、始めたまえ」……。

こんにちはぁ、お邪魔します、と開いた扉の向こうから、フワッといい香りが。シンプルに整えられた白壁の室内にはアロマが焚かれ、床にはバランスボールも。譜面台やチェンバロがなければ、

オーボエ

「生活に支障が出るからオーボエ奏者とは結婚しないほうがいい」が持論の吉井先生（上。ちなみに既婚者）。リードは常に口元に。

ヨガかピラティスのレッスン部屋のようだ。

「建物が古いので、放っておくとややカビっぽいんですよ（笑）。それに、学生にはストレスフルな日々を送ってる人も多いかなと思って」

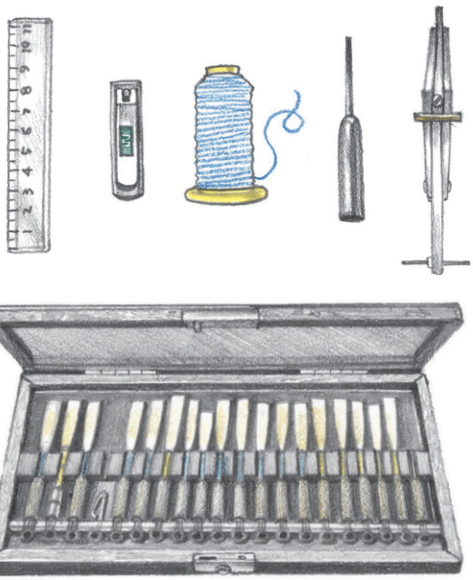
そう言うのは、レッスン室兼教授室の主であるオーボエ奏者、吉井瑞穂准教授。ふんわりしたサマードレスに緩く束ねた髪はサロンオーナーふうで、「〜たまえ」的威圧感はゼロ。スタンバイしている2年生の上條晴翔（かみじょうはると）さんも、伸ばした襟足を青く染めていたりと、こちらもおしゃれさん。

2週間後に前期試験を控えていると聞いていたので、さぞピリピリしているかと思いきや、2人の間に流れるのは、ごくゆったりした空気だった。

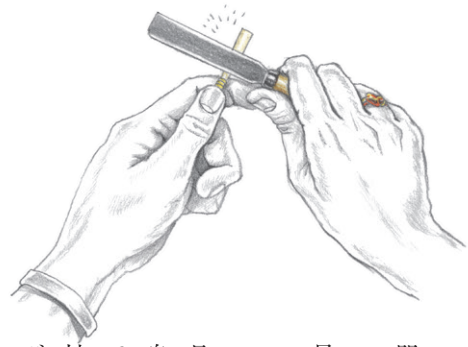
そんななか、先生が発したのは「じゃ、リード見ますか」。頭上の眼鏡（アクセサリーじゃなかった）をかけ直すと、その目がキラリと光る。

リード。オーボエを奏でるには、この繊細な道具の調整が肝心なんです。楽器本体に取り付け、息を吹き込むための細い管状のリードは、拡大してみるとわかるとおり、かなり複雑なつくり。素材のイネ科の多年草であるアシを割って薄いカマボコ板状にし、さらに舟型にして軸となるコルク（チューブ）に巻きつけ、その先端を専用のニッパーやヤスリで整える。この一連の作業を、「できる限り自分でやれるように、と言ってます」と吉井先生。上條さんのリードを手に取ると、さっそく自前の工具で調整を始めた。

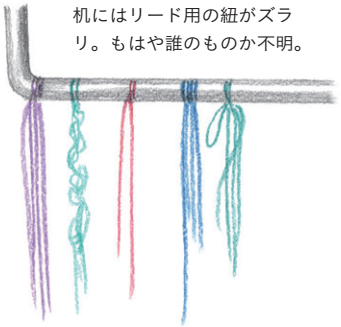
「出汁の素じゃなくて鰹節を削るところから、って感じですね。既製品もあるにはあるものの、それだと他人の喉で歌う感じになっちゃう。機械も部分的には使えますけど、じゃあそのマシンが壊れたらどうするの？って話で。リードがなければ練習すらできないし、演奏会前までにはいい感じに調整もしておかないといけない。オーボエ奏者



リード



コロナ禍中、リードには専用の薬品で感染対策を実施。



机にはリード用の紐がズラリ。もはや誰のものか不明。

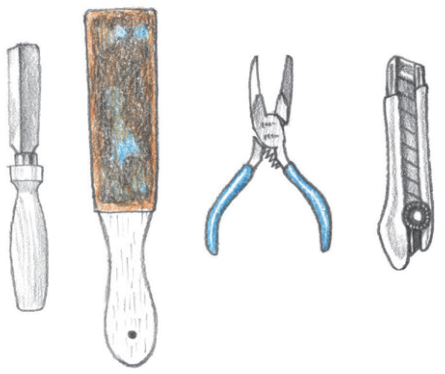
は、常にリードのことでキリキリしてます」

植物素材ゆえ、温度、湿度だけでなく演奏をする場所の標高（！）にも影響を受けるという鋭敏さ。ゆえに奏者の息遣いをダイレクトに伝えられるわけだが、奏者の骨格や歯並び、その日の体調や口の状態までもがリードに、音に影響するのだという。

「10代の頃、海外でのコンサートの前にビッグマックを食べて歯を磨かずに演奏に臨んだら、お肉がほんのちょっとだけリードに挟まって鳴らなかった！　大泣きしましたよ」と吉井先生。演奏以前にこれだけ気を使わなくてはならないとは、確かにストレスフル。しかし、手元をのぞき込んで、ああだこうだとやり取りする2人、傍目（はため）からだと、なんとなく楽しげにも見える。

「オーボエ奏者同士で飲み会すると、話題はリードの情報交換。とくに男性は一晩中」（吉井先生）

「道具も全部持ち歩くから、ただでさえ大きいカバンが常にパンパンです」（上條さん）



使い込んだ工具。アシをチューブに巻きつけた後、吉井先生は針金をつける派、上條さんはつけない派。音の出方も異なるのだとか。

ドイツ語でバッハを奏でよ

手元の数本の調整を終え、「じゃ、バッハやりましょうか」と立ち上がったのは、教室にお邪魔してから1時間後のこと。試験の課題曲を奏でる上條さんに、吉井先生が加わって二重奏になると、典雅なバロックの世界がアロマとともに部屋に広がる。楽器を8の字に揺らすのは「音を周囲に投げて、バロック美術の装飾のような感じで」演奏するため。さらに先生は「日本語でバッハを奏でないで」と上條さんにチェックを入れた。

「バッハはドイツ語の音楽。タタタタ……だと日本語になっちゃうの。今はYouTubeでも映画の音声でも、いくらでもドイツ語は聴けるでしょう？　あっという間に変われるから、ぜひ倣って」

演奏終わりにもリードを確認し、レッスンは終了。隣室にはレッスンを待つ人、そしてリードづくりに励むオーボエ専攻の面々が、やはり和気藹々（あいあい）と語り合いながら手を動かしている。「コロナ禍の間、これができなかったのはキツかったですねぇ」と吉井先生、眺めながらしみじみと言う。

「リードづくりって先輩から教わることが多いし、卒業した方たちもここで情報交換をしてたから。再び集えるようになって本当によかった」

奏者として舞台に立つときはひとりでも、その人にはたくさんの先達や仲間がつながっている。そうやって生み出されていくものだと思うと……個性や才能だけでなく習い、学ぶことで芸術は磨かれるのだなぁと実感した2023年夏。藝大（げいだい）からは、以上です。

バッハを演奏することは「オーボエ奏者には避けては通れない道」と吉井先生。学生とともに精進を重ねる。

お知らせ

今後の催しや大学のさまざまな取り組みを紹介

ベネチア国際映画祭で映画専攻修了生、濱口竜介監督の『悪は存在しない』が銀獅子賞を受賞

第80回ベネチア国際映画祭（イタリア）に参加した『悪は存在しない』の濱口竜介監督（大学院映像研究科映画専攻2期監督領域修了）が最高賞に次ぐ銀獅子賞（審査員大賞）を受賞しました。

濱口竜介監督は、2021年にベルリン国際映画祭において最高賞の金熊賞に次ぐ銀熊賞（審査員グランプリ）を、同年にカンヌ国際映画祭で共同脚本の大江崇允（たかまさ）さんとともに脚本賞を受賞。翌年には作品が、米国アカデミー賞の国際長編映画賞を受賞しています。

『悪は存在しない』には、北川喜雄さん（映画専攻1期撮影照明領域修了）が撮影担当で、山崎梓さん（映画専攻2期脚本領域修了）が、濱口監督とともに編集担当で参加しています。

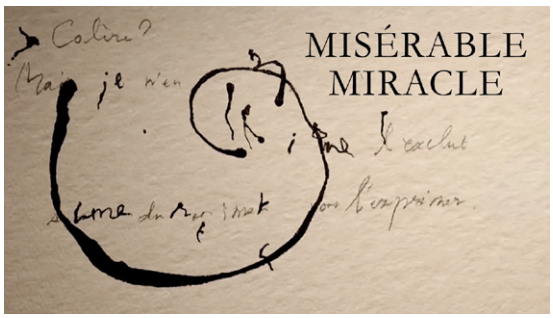
アニメーション専攻修了生・教授がオタワ国際アニメーション映画祭で受賞

第47回オタワ国際アニメーション映画祭（カナダ）において、アニメーション専攻2期修了生の折笠良監督による『みじめな奇蹟／Miserable Miracle』が短編部門グランプリ、同専攻の山村浩二教授による『耳に棲むもの／My Inner Ear Quartet』がVR部門最優秀賞を受賞しました。

昨年の和田淳さん、一昨年の矢野ほなみさんと、3年連続短編グランプリを本学アニメーション専攻修了生が受賞しています。また、山村浩二教授のオタワでの受賞は、昨年の長編グランプリに続いて、4回目（プロデュース作品を入れると5回目）の受賞となります。

同映画祭は、米国アカデミー賞公認の映画祭です。折笠さんは今回の受賞で、アカデミー賞のエントリーの資格を得ました。

©Kodansha Ltd.



©Miyu Productions, National Film Board of Canada, New Deer

ARTsによる世界平和を目指し7芸術大学と「A7」を提唱

東京藝術大学は5月の「G7広島サミット」を機に、日本発の国際貢献として、世界の7芸術大学と連携し、A7（ARTs7）の創設を提案しました。

第1回A7サミットでは、7大学の学長メッセージをメタバース上で公開。共同声明では、「SDGsをはじめとして人間の行動が起因となって表出している社会的諸問題、地球規模の課題に向き合い、ARTsが人のこころに作用する特性を生かしながら、大学における教育・研究及びアーティストの提言・実践を通じて世界平和への貢献を目指す」と発表しました。

11月下旬より「世界平和」をテーマとした「東京藝大アートフェス」の特設メタバース会場で展示が予定されています。

藝大アートプラザで『境界-border-』展を開催

藝大上野キャンパス構内にある、藝大関係アーティストの作品が買えるギャラリー、藝大アートプラザでは、11月26日まで『境界-border-』展を開催中。対立する境界、混じり合う境界、離れていく境界、今や境界はアートにとってもっとも重要なテーマのひとつ。アーティストの考える境界をお楽しみください。

12月2日からは家で楽しむアートを提案する『Made in Art』展、来年1月27日からは藝大生を対象としたアートコンペ受賞作品を展示販売する『藝大アートプラザ・アートアワード』展を開催予定。入場は無料。詳しくは公式ウェブサイトをご覧ください。

https://artplaza.geidai.ac.jp/

大学美術館（上野）の展覧会

本館

第六回 公益財団法人芳泉文化財団 文化財保存学日本画・彫刻研究発表展
美しさの新機軸
〜日本画・彫刻 過去から未来へ〜
11月3〜12日

芸術未来研究場展
11月10〜26日

東京藝術大学大学院美術研究科博士審査展2023
12月15〜21日
※陳列館でも開催

第72回 東京藝術大学卒業・修了作品展
2024年1月28日〜2月2日
※陳列館、正木記念館でも開催

大吉原展 江戸アメイヂング
3月26日〜5月19日

陳列館

青木淳退任記念展
雲と息つぎ
—テンポラリーなリノベーションとしての展覧会 番外編—
11月18日〜12月3日

第8回 東京都特別支援学校アートプロジェクト展
2024年1月6〜17日

GAアートプロデュース領域演習展（仮）
3月22日〜4月7日

奏楽堂（上野）の演奏会

藝大フィル 合唱・定期 第419回
「ドイツ・レクイエム」
11月9日19時
4000円

モーニング・コンサート 第10回
11月16日11時
1500円

ウィンドオケ定期 第96回
11月18日14時
一般2500円
高校生以下500円

邦楽定期 第89回
11月22日17時
3000円

シンフォニーオケ定期 第68回
11月23日15時
一般2500円
高校生以下500円

藝大プロジェクト2023
仮面 ―隠されたもの、顕れたもの
第2回「語り、交わる。
仮面のヨーロッパ」
11月25日15時
全席自由

3000円

第73回 チャリティコンサート
メサイア公演
12月22日18時30分
SS席 1万2000円
S席 6000円
A席 5000円

第40回「台東第九公演」
下町で第九
12月24日15時
3000円

藝大室内楽定期 第50回
2月3日・4日各14時
各2500円

モーニング・コンサート 第11回
2月8日11時
1500円

モーニング・コンサート 第12回
2月15日11時
1500円

藝大チェンバーオケ定期 第42回
2月18日15時
2500円

モーニング・コンサート 第13回
3月14日11時
1500円

萩岡松韻 退任記念演奏会
3月15日13時
無料
要事前申し込み

上條妙子 退任記念演奏会
3月16日15時
無料
要事前申し込み

迫昭嘉 退任記念演奏会
3月19日19時
無料
要事前申し込み

河野文昭 退任記念演奏会
3月20日15時
無料
要事前申し込み

第17回 奏楽堂企画学内公募演奏会
3月27日 時間未定
詳細未定

ジュニア・アカデミー
成果披露演奏会
3月29日
第1部11時20分（予定）
第2部14時10分（予定）
2000円

＊一部の公演を除き、全席指定
＊展覧会・演奏会の名称、会期・日時などが変更になる場合があります。最新情報は、東京藝術大学公式ウェブサイト（https://www.geidai.ac.jp/）をご覧ください。
＊展覧会についてのお問い合わせ
東京藝術大学大学美術館
☎050-5541-8600
（ハローダイヤル）
＊演奏会についてのお問い合わせ
東京藝術大学演奏藝術センター
☎050-5525-2300
＊演奏会チケットの取り扱い
ヴォートル・チケットセンター
☎03-5355-1280
チケットぴあ
https://t.pia.jp/
東京文化会館チケットサービス
☎03-5685-0650
イープラス
https://eplus.jp/
藝大アートプラザ（店頭販売のみ）
☎050-5525-2102

○藝大基金寄附者ご芳名

東京藝術大学基金（藝大基金）へ温かいご支援を賜り、深謝申し上げます。本号では、2023年2月から2023年9月までに寄附をいただいた皆様のご芳名を掲載させていただきます（掲載をご承諾された方のみ）。

［個人の皆様］

宗次德二様　3300万円
加賀美猛様　100万円
戸谷克昌様　100万円
馬場渉様　100万円
田口千晴様　50万円
堀内豊太郎様　50万円
佐藤隆幸様　36万 5000円
村上耿二様　31万円
安藤正夫様　20万円
樋口京子様　13万円
小川洋司様　10万円
齋藤洋様　10万円
堀内和幸様　10万円
秋葉弘実様　8万円
宇都宮研様　5万円
菊川政弥様　5万円
小池高之様　5万円
原田真粧美様　5万円
米澤武史様　5万円
宇都木丈夫様　3万円
金澤初生様　3万円
柴本美蘭様　3万円
玉置雄三様　3万円
福島宏明様・小百合様　3万円
渡邊剛様　3万円
藤本昌志様　2万円
安田勝紀様　2万円
秋重知輝様　1万円
阿部順様　1万円
伊藤アスカ様　1万円
上田武夫様　1万円
大井由美子様　1万円
大浪衛様　1万円
小田慎也様　1万円
金森恵美様　1万円
仮屋園伸様　1万円
川下繁二様　1万円
後藤英実様　1万円
杉浦俊太郎様　1万円
鈴木敦子様　1万円
高橋昭彦様　1万円
高橋直人様　1万円
田村郁恵様　1万円
唐屋正様　1万円
鳥井英幸様　1万円
中出睦様　1万円
中山昌樹様　1万円
福田清子様　1万円
福田典子様　1万円
穂苅肇様　1万円
星野敏彦様　1万円
細谷和夫様　1万円
松村嘉文様　1万円
三知矢進重様　1万円
皆川夏紀様　1万円
門田伸一様　1万円
秋山境様　5000円
池田美幸様　5000円
片桐聡伸様　5000円
竹村恭一様　5000円
本島仁子様　5000円
迫村優来様　2000円
藤代國忠様　2000円
金澤晴樹様　1000円
鈴木克典様　1000円
立田悠美子様　1000円
青山夏実様
五十君啓泰様
石井則久様
井出久實子様
井上正英様
今井梨乃様
岩井美子様
岩田ひろみ様
宇佐美敏男様
内沼真一郎様
大川聡様
岡哲郎様
奥村康様
小澤薫代様
河合理恵様
川村茂樹様
河本亮様
北川翔一様
鬼頭綾子様
古賀崇様
小橋哲郎様
小林裕之様
駒米三恵子様
櫻井智恵様
佐藤昌吾様
島野聖章様
新谷眞理子様
鈴木哲生様
関悠樹様
髙木雄太様
髙橋和美様
田林健一郎様
趙誠峰様
徳永尊彦様
友松典子様
長浦武史様
新島祐司様
野尻悠太様
廣瀬俊廣様
藤原滋木様
船橋晴雄様
三好克美様
村上德子様
森下祐子様
森田滉市郎様
山上芳昭様
山本典子様
弓場啓司様
弓場多恵子様
渡辺孝様

［法人等の皆様］

Piascore 株式会社様　10万円
一般社団法人長唄東音会女子部様　1万円
一般社団法人長唄東音会様　5000円
大興商事株式会社様
山田産業株式会社様

○藝大基金のお願い

「藝大基金」は、東京藝術大学の長期的・安定的な財政基盤として、教育研究活動や社会連携活動の一層の発展と、我が国における芸術文化の振興などに資することを目的に設立されました。各種プロジェクトなどの実施と、学生へのさらに充実した支援体制を築くため、広く地域社会や企業などの皆様からご寄附を募っております。藝大基金の趣旨にご理解をいただき、ご支援を賜りますようよろしくお願いします。

お問い合わせ
社会連携課渉外企画係　☎ 050-5525-2400
藝大基金ウェブサイト https://fund.geidai.ac.jp/

編集部より

『藝える』編集部では、皆様からのご意見・ご感想などをお待ちしています。今号の内容についてのご感想や、今後のご要望などありましたら、こちらまでお寄せください。

〒 110-8714　東京都台東区上野公園 12-8
東京藝術大学内　『藝える』編集部
Fax：03-5685-7761
E-mail：toiawase@ml.geidai.ac.jp